［認知症対応型共同生活介護用］

1. 評価結果概要表

作成日　2010年3月20日

【評価実施概要】

事業所番号	2692800036
法人名	社会福祉法人　城陽福祉会
事業所名	グループホーム　ひだまり
所在地	〒610－0101　京都府城陽市平川浜道裏　29－5 （電　話）0774－54－7817

評価機関名	社団法人京都ボランティア協会		
所在地	京都市下京区西木屋町通上ノ口上ル海湊町83-1　ひと・まち交流館　京都1階		
訪問調査日	平成22年2月16日	評価確定日	平成22年4月8日

【情報提供票より】（平成22年1月1日事業所記入）

（1）組織概要

開設年月日	平成　20　年　5　月　1　日	
ユニット数	2 ユニット	利用定員数計　18　人
職員数	18　人	常勤　10　人，非常勤　8　人，常勤換算　11.3　人

（2）建物概要

建物構造	軽量鉄骨造り
	2 階建ての　1～2　階部分

（3）利用料金等（介護保険自己負担分を除く）

家賃（平均月額）	7万　円	その他の経費（月額）	円
敷　金	有（　　）　〇無		
保証金の有無 （入居一時金含む）	有（　　） 〇無	有りの場合 償却の有無	
食材料費	朝食　円	昼食	円
	夕食　円	おやつ	円
	または　1日あたり　1670円		

（4）利用者の概要（　1　月　1　日現在）

利用者人数		18 名	男性　4 名	女性	14 名
要介護1		5　名	要介護2	5	名
要介護3		5　名	要介護4	3	名
要介護5		0　名	要支援2	0	名
年齢	平均	87 歳	最低　79　歳	最高	96 歳

（5）協力医療機関

協力医療機関名	医療法人啓信会　きづ川病院

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

児童福祉から高齢者福祉まで手がけている法人が開設したグループホームで、城陽市内の中学校に隣接した住宅街にある。この1年、職員の異動が続き、家族の不安を招いたが、現在は職員同士は良い雰囲気になってきている。管理者等は職員にやりがい感をもって働いてほしいと、介護だけでなく生活のなかの特技を引き出し、それを利用者の暮らしに生かす取り組みをしている。調理師の免許をもっている人は食事だけでなく、おやつ作りにアイディアを出し、和裁の得意な人は古い着物地を使ってきれいな小物を作ること、牛乳パックで椅子を作る、毛糸でマフラーを編む等々の活動を展開している。食事もできなかった利用者が敬老会でハーモニカの演奏をすることになり、成功したことにより認知症が改善されるなど、生活の中の多彩な楽しみが利用者にとって大きな効果をもたらしている。今後は認知症理解をさらに深めて専門性を高めていくことが期待される。

重点項目①

前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況（関連項目：外部4）

昨年からの改善点としては、利用者の個別外出を充実させたこと、職員の力を利用してさまざまな手作りの取り組みに挑戦していること、門扉を少しの時間でも開放しようとしていることなどが挙げられる。

今回の自己評価に対する取り組み状況（関連項目：外部4）

今回の自己評価は職員に配布して記入してもらっている。職員が理念の認識、地域との連携などを意識していないことが判明し、改めて研修をしている。

重点項目②

運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み（関連項目：外部4，5，6）

利用者、家族、民生委員、自治会、高齢者クラブ、市高齢介護課職員、地域包括支援センター職員がメンバーとなり、隔月に開催され、記録が残されている。ホームからの報告と意見交換がおこなわれ、参加メンバーにたいして認知症理解を図る話し合いとなっている。

重点項目③

家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映（関連項目：外部7，8）

家族アンケートを実施し、職員間の連携が不十分との意見があり、職員ミーティングで話し合っている。また味噌汁がおいしくないとの意見に対してはかつおと昆布の出汁をとるように改善している。クリスマス会や弁当持参の花見には家族にも案内して参加してもらっている。半分くらいの家族が参加され、家族同士の交流が進んでいる。

重点項目④

日常生活における地域との連携（関連項目：外部3）

地域との関係には苦慮しているが、近くの中学校とは良好な関係であり、中学生と会話、マラソンの応援、バラ園の手入れ、運動会の見学などをしている。市のふれあい祭り、北部コミュニティセンターでのイベント、文化ホールでのコンサートや和太鼓の演奏を見に行っている。

2.　評 価 結 果（詳 細）

（　　部分は重点項目です　）

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
Ⅰ．理念に基づく運営					
1．理念と共有					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、ホーム独自の理念をつくりあげている	法人の理念を踏まえて「一緒に笑い、一緒に楽しみ、一緒に過ごす、もう一つの我が家」をホームの理念として掲げ、パンフレットに明記するとともに、玄関に掲示している。これは開設時のスタッフが話しあって決めたものである。家族や地域の人にも運営推進会議などで説明し、理解を図っている。		
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	職員に理念の認識が浅いこともあり、認知症の研修を深めるなかで、利用者にとっては馴染みの関係のなかでの生活を支援し、自信を取り戻してもらうことが大事だと、職員ミーティングで繰り返し話し合っている。		
2．地域との支えあい					
3	5	○地域とのつきあい ホームは孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	地域との関係には苦慮しているが、近くの中学校とは良好な関係であり、中学生と会話、マラソンの応援、バラ園の手入れ、運動会の見学などをしている。市のふれあい祭り、北部コミュニティセンターでのイベント、文化ホールでのコンサートや和太鼓の演奏を見に行っている。		
3．理念を実践するための制度の理解と活用					
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	今回の自己評価は職員に配布して記入してもらっている。職員が理念の認識、地域との連携などを意識していないことが判明し、改めて研修をしている。昨年からの改善点としては、利用者の個別外出を充実させたこと、職員の力を利用してさまざまな手作りの取り組みに挑戦していること、門扉を少しの時間でも開放しようとしていることなどが挙げられる。		
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	利用者、家族、民生委員、自治会、高齢者クラブ、市高齢介護課職員、地域包括支援センター職員がメンバーとなり、隔月に開催され、記録が残されている。ホームからの報告と意見交換がおこなわれ、参加メンバーにたいして認知症理解を図る話し合いとなっている。		

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
6	9	○市町村との連携 ホームは、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	市の担当者とは相談しており、対応してもらっている。市には地域密着型事業所連絡会がなく、また介護相談、認知症ケア教室等が開催されていない。	○	市民にたいして、介護相談や認知症理解のための研修会、福祉用具説明会等が開催され、その講師としてホームの専門性が発揮できる取組が望まれる。
4.理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 ホームでの利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	毎日来る人から毎月来る人まで家族の面会は多く、その際に情報交換している。行事の際に撮った写真は家族にあげている。広報誌は発行されていない。		
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族アンケートを実施し、職員間の連携が不十分との意見があり、職員ミーティングで話し合っている。また味噌汁がおいしくないとの意見に対してはかつおと昆布の出汁をとるように改善している。クリスマス会や弁当持参の花見には家族にも案内して参加してもらっている。半分くらいの家族が参加され、家族同士の交流が進んでいる。		
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	法人内異動もふくめて、今回職員の異動が多くあり、これまでつくりあげてきた当ホームの介護を引き継いでもらうために指導している。利用者のキーワードを見つけて、利用者へのダメージを防ぐ工夫をしている。新しく担当になった職員はじっくりかかわるようにしている。		
5．人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修計画があり、実施している。認知症、感染症、緊急対応等は内部研修で実施し、外部研修は認知症、バリデーション等に参加している。外部研修の受講者は報告書を書き、職員ミーティングで伝達研修している。資格取得にはシフトの調整と勉強会で支援している。職員の個人目標の設定とその支援は不十分である。		
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	市に地域密着型事業所連絡会がなく、他のグループホームとの交流はほとんどない。	○	職員が事業所内に閉じこもることなく、常に自らの業務を振り返り、サービスの向上をはかっていくためには、他のグループホームを見学したり、職員同士の交流をしたり、交換研修することが求められる。

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援 1．相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気に徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	利用者には家族とともに見学してもらい昼食をはさんで3時間くらい過ごした人や、試し利用として宿泊した人もいる。利用が始まると、なるべく早くなじんでもらうために、利用者のキーワードを把握し、それをもとにじっくり関わっていくようにしている。		
2．新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながら喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	人生の先輩としての利用者から昔の人の守ってきた人生訓のようなものを教えてもらっている。また大根の煮方、野菜の下ごしらえ等、生活の知恵も学ぶことが多い。利用者と接していると経験の豊かさからくる発見がいつもある。言葉遊びやことわざの知恵も豊富である。利用者、家族、職員の三者が共生し合える関係を築いていきたいと考えている。		
Ⅲ　その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント 1．一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用に当たっては利用者と家族が来訪され、そこで情報を得るが、居宅への訪問も必ず行い、利用者の過ごしている環境を知るようにしている。介護サービス情報、医療情報、家族情報を収集している。生活歴は家族が情報源であり、その人らしい特徴を把握し、記録に残している。		
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイディアを反映した介護計画を作成している	最初は仮の介護計画をたて、3カ月くらいの経過観察の後、確定の介護計画をたてている。種々の情報をもとにたてているが、介護計画は個別ではなく、また具体性に欠けるものが多い。生活の楽しみは積極的に計画に入れているが、生活歴を反映したものは少ない。	○	介護計画は生活歴やその人らしい特徴を生かした内容にし、具体的なものが必要である。そのためには、ケアマネジャーだけでなく、利用者や家族、職員のアイディアや知恵を結集してたてることが望まれる。
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	モニタリングは介護計画の項目にしたがって実施されているが、支援経過記録は介護計画の項目にそって記録されていない。介護を実施したときに利用者の表情や発言は記録されているが、職員の気づきが書かれていない。介護計画の変更の根拠が記録で確認できない。	○	利用者の毎日の経過記録は介護計画の項目にしたがって記入し、介護を実施したかどうか、そのときの利用者の表情や発言、また介護がうまくいかなかったときの考察などを記録に残し、モニタリングの根拠となるような内容にすることが望まれる。介護計画の変更のときには再アセスメントの実施も求められる。

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
3. 多機能性と生かした柔軟な支援（ホーム及び法人関連事業の多機能性の活用）					
17	39	○ホームの多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々の要望に応じて、ホームの多機能性を活かした柔軟な支援をしている	利用者のカットやパーマなどは行きつけの店につれていっている。すぐ近くの中学校の校庭で育てられている花を見に行ったり、マラソンを玄関先で応援したりまた、文化ホールへコンサートを聞きに行ったりなどの地域資源の活用をしている。近くにある同法人の特養には毎月お茶会に参加するなど、行事に参加している。法人は保育園を運営しており、保育園児との交流も利用者の楽しみである。		
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医とホームの関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	利用者のかかりつけ医への受診は家族が同行しており、ホームで把握している情報をもとにサマリーを渡したり、家族とともにつきそっていく場合もある。認知症については利用者のかかりつけ医と連携しており、情報提供も受けている。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	重度化や終末期対応についてはホームとしての方針が決まっていないので明文化もしていない。家族は「最期は特養に」と考えている人が多いが、きちんと意向確認していない。職員は自信がないという人の一方で利用者のためにがんばりたいと思っている職員もいる。	○	利用者が重度化した場合やターミナルケアについて、ホームとしての方針を、職員間で十分話し合い、明文化するとともに、それをもとに利用者や家族と話し合い、意向確認をしておくことが求められる。
Ⅳその人らしい暮らしを続けるための日々の支援 1. その人らしい暮らしの支援 （1）一人ひとりの尊重					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	居室もトイレも中から鍵をかけることができ、かける利用者もいる。トイレ誘導などの声かけは十分注意している。		
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	起床も就寝も利用者のペースであり、朝寝の人は8時ころに起きてくる。また11時までテレビを見ている利用者もいる。入浴も朝に入りたい人には午前中に支援しており、夕食後に入る人もいる。		

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
（2）その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	法人の給食委員会がたてた1カ月の献立により食材は配達してもらっている。利用者の希望により献立が変わることもあり、ユニットによっても献立は異なっている。野菜を切ったり、豆の皮をむいたりの調理と食器洗いなどは利用者と職員が行なっている。すきやきや焼肉、鍋料理や外食も楽しんでいる。職員も同じものを同じ食卓で食べながら、食事を楽しむことが期待される。		
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	希望によっては毎日入る利用者にも支援しており、少なくとも週2回は入るように取り組んでいる。夜間に入浴する利用者もいる。マンツーマンの同性介助である。ゆず風呂なども楽しんでいる。		
（3）その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	畑や玄関先の草むしり、植木の刈り込みなど、利用者の経験を生かして役割りが果たされている。畑には大根や人参を植えており、昨夏はなすびがたくさんとれた。敬老会であいさつをしたり、ハーモニカ演奏をする利用者もいる。古い着物地でティッシュボックスカバーやランチョンマット、毛糸でマフラー、牛乳箱で大きな椅子など、男性利用者も含めてその成果を楽しんでいる。		
25	61	○日常的な外出支援 ホームの中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	利用者は日常的にはホームの近くや近鉄の駅まで散歩したり、コンビニに買い物に行ったり、近くの農家に野菜をいただきに行ったりしている。プライムインや木津川の堤防での花見、荒見神社への初詣、外食などのお出かけもしている。東山浄苑へのお墓参りやおいしい水無月やみたらし団子を買いに行きたいなどの個別外出もしている。		
（4）安心と安全を支える支援					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	日によっては1時間ほど開放することもあるが、ふだんは日中も門扉を施錠している。玄関ドアは鍵をかけていないので、利用者は敷地内の芝生の庭などを散歩することはできる。	○	認知症の利用者にとって、自由に外に出ることができないことによる大きなダメージについて、職員間で十分話し合い、短時間でも開放し、時間を延ばしていくなど、様々な工夫をすることが求められる。
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	消火器、通報機、感知器、スプリンクラー、防火管理者、消防計画等、火災に関しては準備している。毎月避難訓練しているが、夜間想定の訓練や地域の人が参加しての訓練は実施されていない。備蓄の準備を検討している。	○	避難訓練は必要不可欠であり、ホームで取り組むだけでなく、地域の人にも参加してもらい、夜間想定の訓練も含めて、十分な訓練をすることが望まれる。

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
（5）その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	利用者の食事摂取量と水分摂取量の記録が残されている。。1日1400kcalとし、献立のカロリー値や栄養バランスについても点検している。		
２．その人らしい暮らしを支える生活環境づくり （1）居心地のよい環境づくり					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	門扉から玄関までの両側にプランターに花が植えられ、玄関ロビーにも観葉植物の鉢や花篭を置いている。階段脇に帯地で利用者がつくった敷物の上に陶器の大きな壷が飾ってある。壁には刺繍で描かれた絵を額に入れて掛けている。居間兼食堂はゆったりして、大きな窓から日が降り注ぐ。隅に観葉植物の鉢、お琴、オルガンなどが置かれている。壁には布のカレンダー、どっしりとした掛時計があり、不快な光や音がなく、整頓されすぎず、居心地のよい雰囲気になっている。		
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室には材質や色、柄の異なる暖簾がかかっており、廊下をやわらかい雰囲気にしている。クローゼットと洗面台が備え付けられ、ベッド、衣装掛け、椅子、テレビ等を利用者が持ち込んでいる。1室を寝室に、1室を居間にしている夫婦は居間にはホームコタツを置き、目の高さに時計を掛け、読みかけの新聞を置いている。仏壇や家族の写真、ぬいぐるみ、ピエロの人形などを置き、それぞれ個性あふれる部屋になっている。		